



## あんげろす第67号

著者	遠藤 興一, 渡辺 祐子, 徐 正敏, 朱 海燕, 豊川 慎, 杉田 有衣
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
巻	67
発行年	2015-07-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/2465">http://hdl.handle.net/10723/2465</a>

# あんげろす

今、考えたいこと

遠藤興一

この国は憲法9条をめぐる、戦後史の転換点にさしかかっている。こういう時こそ、戦後史、そして、戦前史を学び直すことが必要だ。その昔、1930年代論が論壇を賑わせたことがあった。昭和ヒトケタという時代は、軍縮、平和と安定の世相が暮しの願いであり、人びとの期待であった。そう、「御大典」という祝賀に湧きたったのもこの頃。それがいつしか、軍国主義の跋扈する時代へと変わっていった。色川大吉の「昭和世相史」たどっても、戦争がヒタヒタと近づいているなどとは、当時誰も考えなかった。「まさか、そんなことはあるまい」、いかな政府といえど「そんなことまではすまい」、という希望的観測のなか、人びとは東京音頭に浮かれた。ひるがえってみるに、今も民主憲法のもとで「そんなことはやるまい」と、大半の国民は政権政党を信じている。果たしてそうなのか。信じてよいのか。戦争に突き進む前の昭和初期、平和と経済復興は人びとの抛り所、心の願いであった。そう、まるで今の日本のように。



第67号

2015年7月

渡辺祐子

2015 年度、キリスト教研究所は主任と教学補佐の交代、そしてお二人の客員研究員就任という大きな変化を伴って出発しました。

昨年度まで教学補佐として研究所の業務に献身的につくして下った納谷智子さんは任期満了をもって退職されました。納谷さんが着任されたところは教学補佐の任期は厳密に3年と定められていましたが、そのうち3年間の延長が認められることになり、納谷さんは都合6年間キリ研にいらしたことになります(現在は、任期は最長5年)。私がキリ研とかかわるようになったのは2003年で、幾人もの教学補佐の方々にお世話になりましたが、その中でも納谷さんは最も長くお付き合いした方でした。任期満了の時期が近づいても後任探しが難航し、見つからないうちはアルバイトとして来ていただくことにしておりましたので、昨年度末の3月一日研究会で退職のご挨拶をいただくことも致しませんでした。そのため納谷さんが学期中に突如キリ研を去られたようにお感じの方もおられるようですが、それはひとえに私の配慮不足によるものです。ご心配をおかけした皆様には心よりお詫び申し上げます。またこの場を借りて、6年間にわたる納谷さんのお働きに改めて心からの感謝を申し上げます。

この6月からは、新教学補佐として杉田有衣さんをお迎えすることができました。ご本人も書かれているように杉田さんは仏文科のご出身、現在は絶滅危惧種に近いといえるかもしれない文学少女で、中でも宮沢賢治が大好きな方です。仏文在学中は、今や芥川賞作家となった元明学教員の小野正嗣氏のゼミにも出席されていたとの由。着任早々、研究会、講演会が目白

押しで、慣れない仕事をたくさんしていただいていると思いますが、杉田さんがキリ研の「顔」になるまでそう時間はかからないのではと期待しています。

さて、もうひとりキリ研に新しい風を吹き込んでくださっているのが、新所員になると同時に主任をお願いした徐正敏先生です。徐先生についてはもはやご紹介するまでもないでしょう。延世大学神学部教授、同大学副学長を歴任された神学者(歴史神学)で、韓国キリスト教史、日韓キリスト教関係史研究分野のパイオニア的存在です。本学は徐先生を、2008年に教養教育センター招聘教授として、さらに2012年度からは客員教授としてお招きし、この間協力研究員として本研究所にもご協力いただいていた。今年度から正式に所員、しかも主任として関わってくださることになりましたので、研究所としてはこれまでもすでに力を入れていたアジアのキリスト教に関する研究をさらに発展させたいと願っているところです。6月には『韓国からの通信』の著者TK生こと池明観先生講演会を、7月には韓国アジアキリスト教史研究会の初代会長で北朝鮮キリスト教史の第一人者金興洙先生講演会を催すなど、早速、日韓関係を中心としたアジアのキリスト教研究のための企画を実施いたしました。

もちろんキリ研の活動領域は上記分野に限られるものではありません。もっとも古い研究プロジェクトである宣教師研究は、戦後の明学にかかわった宣教師に関する調査研究を中心に進められていますし、キリスト教主義教育、白金文学研究、キリスト教芸術研究、和解と平和研究等、今年度も多彩な研究プロジェクトが計画されています。ことあるごとに申しあげておりますが、これらの研究は専任の所員だけでは到底こなせるものではなく、お二人の客員研究員、そして学外の協力研究員の皆さまのご協力、ご理解なくしては進めることができません(宣教師研究はその好例です)。

どうか今年度もキリスト教研究所の活動にご理解を賜り、それぞれの研究プロジェクトの発展に積極的にかかわってくださいますようお願いする次第です。

最後になりましたが、宗教改革史と並行して、オランダ留学を期に関心を持たれた日本人キリスト者の戦争責任問題も研究されている豊川慎氏、中華民国期におけるキリスト教と中国社会の問題を追究しておられる朱海燕氏のおふたりの客員研究員をお招きできたことをご報告し、年度はじめの所長挨拶といたします。

わたなべ・ゆうこ(所長)

主任の挨拶

今年度から教養教育センター所属教員に就任すると同時に、キリスト教研究所の主任に任命されました徐正敏です。

韓国では大学の研究所に所属しておりましたが、日本での経験はありません。不安もありますが、渡辺祐子所長をはじめ、所員の方々、研究員の皆様の協力を得て、キリスト教研究所の発展に尽力したいと思います。よろしく願いいたします。

そ・じょんみん(主任)

客員研究員に就任して

朱海燕

このたびは渡辺祐子先生にお声をかけていただいたことにより、キリスト教研究所の客員研究員として研究に従事する機会を得ることができました。ここに、深く感謝いたします。このような縁に恵まれたのは、キリスト教関連の研究を行っているためですので、この場を借りて私の故郷におけるキリスト教の状況を説明しながら、私がどのようにキリスト教を知り、その研究に関わるようになったかを紹介したいと思います。

私の故郷は中国の延辺朝鮮族自治区龍井市の小さな村です。龍井といえば、朝鮮人が清国で最初に村をつくり住み着いたところで、詩人尹東柱の生まれ故郷として知られていますが、文化大革命前まではカトリックやプロテスタントなど、キリスト教が盛んな地域でもあったそうです。しかし、私が青少年期を過ごした龍井は、どこにでもキリスト教的な雰囲気はなく、私はずっとキリスト教と無縁な街だと思い込んでいました。当然ながら尹東柱のキリスト教的背景についても知りませんでした。彼の母校である大成中学校を前身にもつ龍井中学に通い、学校の愛国主義教育の一環として彼の記念館を参観したことがあるにもかかわらずです。ましてや学校近くにあった朝鮮族民俗博物館が元々教会の礼拝堂(龍井聖潔教会)だったことを知ることもありませんでした。これは私の観察力の鈍さによるところが大きいですが、78年以後改革開放政策によって人々の信仰活動が認められたとはいえ、90年代まで教会再建は進まず、その活動があまり表面化されなかったからでしょう。

つまり、高校生になるまで私のまわりにはクリスチャンがいなかったわけです。私がはじめてキリスト教

を知ったのは、子供のとき見た『上海灘』という香港ドラマを通じてでした。1980年代後半、白黒テレビが普及しはじめると、テレビドラマは絶大の人気を博し、香港・台湾・シンガポールや日本のドラマがよく放送されました。このドラマは当時最も人気を集めたドラマの一つでしたが、ヒロインの「馮程程」は敬虔なクリスチアンだったので、ドラマのなかでは何度も教会で祈るシーンがありました。「上帝 (god)」という言葉はこのドラマを見て覚えた単語です。このようにテレビを通じてぼんやりとキリスト教の存在を知りましたが、92年中韓国交建交後、90年代末になるとテレビや映画のなかだけではなく、現実にも私のまわりに一人二人クリスチアンが出始めました。

97年ごろでしょうか、清明の日に親戚のお墓参りに行ったとき、延吉に住んでいる伯母が自分はキリスト教に入信したから跪くことはできないと、皆と一緒に跪拝することを拒否しました。そのとき、私ははじめてクリスチアンは祖先のお墓に跪拝してはならないことを知りました。その後、私は高校に進学し3年後には無事大学に入りました。その間、街や村では宣教活動が大きく発展し、街には立派な教会堂が立てられました。村でも2000年ごろには韓国教会の支援で教会用建物を購入し、まもなくして叔父がその教会の執事になりました。叔父の話から、村のこの教会は韓国教会が来てつくったのではなく、78年から家庭教会という形で存在していたことが後でわかりました。その後、叔父は韓国に出稼ぎに行くことになって執事をやめました。信者は2000年の100人ほどから2007、8年には400人に増えました。その後漢族が分離して新たに教会をつくったことと、出稼ぎにいく朝鮮族が増えたことによって現在は約40人だけ残っているようです。このように延辺のキリスト教は著しい発展（とりわけ2000年以後）を遂げましたが、依然として学校では無神論で学生を教育していたし、教会に通

うことを問題視する人もいました。小学校の時から愛国主義教育をうけた私もキリスト教にたいして無知でありながら、学校で教わった無神論でもって叔父を説得しようとしたことがありました。共産党の教育が成功した一例といえるでしょう。

しかし、大学に入ると私のこのような態度は少しずつ変わりはじめました。歴史学部だった私は世界史の勉強を通じて表面的ながらだんだんとキリスト教について知るようになり、ギリシア・ローマ史が好きになったことがきっかけで、しだいにキリスト教に興味をもつようになりました。そして大学院進学のための日本留学を決心したときに、「典礼問題」を中心に明末清初のキリスト教と儒教文化との交流と衝突を研究することにし、来日までの約半年間一生懸命にイエズス会の中国での伝道に関する本を読みました。しかし、その研究には膨大な知見が必要なため、来日後指導教員に研究テーマを変えるよう勧められ、現在の1920年代の中国の反キリスト教運動に変更し、これをテーマに博士論文を書き上げました。

このたびは、神のお導きによりキリスト教研究所でキリスト教に接し、観察し、勉強する機会が与えられましたので、この機会を無駄にせず、キリスト教への理解を深め、より客観的に冷静に見ることができるよう研鑽に努めたいと思います。どうぞよろしく願います。

しゅ・かいえん（客員研究員）

豊川慎

先日 NHK ラジオ「宗教の時間」に出演する機会を与えられた。戦争を知らない戦後世代のキリスト者として平和についてどう考えるのか話して頂きたいという依頼であった。30分という限られた時間内ではとても話きれないテーマではあるが「平和学からの問いかけ」と題して平和について思うことをインタビュー形式で語った。平和学とは何か、戦後世代として戦争や平和の問題に取り組むのはなぜか、平和を旨とするはずのキリスト教世界で戦争はどのように捉えられてきたのか、「正当な戦争」とは何か、戦時下の日本のキリスト教会はどのような状態だったのか、わたしたち一人一人が平和の実現のためにできることは何かといった質問であった。インタビュアーのそれらの質問に対して私が答えたことの一部を下記に記すことにしたい。

私が実行委員として関わっていることの一つに保土ヶ谷の英連邦戦没者墓地における追悼礼拝がある。この墓地には「泰緬鉄道」での強制労働の後、日本の軍需工場や炭鉱でも重労働を強いられ、生命を奪われた1873名の連合軍捕虜が眠っている。この墓地において、1995年8月5日、戦後50年を機に、永瀬隆（元陸軍通訳）、齋藤和明（ICU）、雨宮剛（青山学院）の三氏によって始められたのが英連邦戦没捕虜追悼礼拝である。それは、憎しみの消えない犠牲者と日本人との和解のきっかけが与えられることを願って始められたものであった。以後、追悼礼拝は毎年8月の第一土曜日午前11時から執り行われ、戦後70年の今年は21回目を数える。

私には追悼礼拝に参加する際にいつも思い起こす二つの事柄がある。一つは祖父の戦争体験である。祖

父（片山弘二 1919-2012、日本キリスト改革派教会元牧師）はフィリピンで終戦を迎え、米軍に投降し、捕虜収容所に収容された。私は祖父から捕虜収容所の話をよく聞いた。毎週日曜日には収容所内で礼拝を守ることが許可され、日本人への伝道の手伝いもしたという。また、「マレーの虎」とも呼ばれた山下奉文大将や洪思翊中将などの絞首刑に祖父はクリスチャンであったがゆえに立ち会うという経験もした。祖父は収容所において国際法に合った捕虜待遇を受けていたが、それとは逆の泰緬鉄道敷設工事における日本軍の連合軍捕虜の虐待などについて学ぶにつれ、追悼礼拝に参加して犠牲者を追悼し戦争の記憶を継承することが戦後世代の平和責任であることを祖父の捕虜経験の話を思い起こしながら考えるのである。

もう一点は、アムステルダム自由大学に留学していた時のこと。村岡崇光先生（ライデン大学名誉教授）が「日蘭和解の会」という対話集会を催しておられ、それに参加した時の衝撃が今でも忘れられない。日本はインドネシアにおいてオランダの民間人の多くを抑留したのであるが、そこでの苦しい経験の傷が未だ癒えないオランダの方々が多くいることを知った。抑留経験に関する話を伺う中で、「あなたたち若い日本人は歴史の授業で何を学んできたのか。私たちがどれほどひどい目にあってきたのかを教科書で学ばなかったのか」と詰問されたことがあった。未だ戦争の傷が癒えない人が多くいるという現実。そして戦後生まれの戦後責任として過去に学ぶことの重要性を「日蘭対話集会」で教えられた。

英連邦戦没捕虜追悼礼拝は平和教育のフィールドとしてまた戦争の記憶の継承の場としても大きな意義を有している。若くして命を落とした連合軍捕虜1800名あまりの方々のお墓に刻まれた言葉を読んでいくと、二度と同じ過ちを繰り返してはならないという思いへと促される。ヴァイツゼッカー大統領

(当時)がドイツの戦後40年を機に語った「荒れ野の40年」演説の中の有名な一節「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」とあるように、追悼礼拝を通じて過去から学び、過去を想起し、今ここに生きるキリスト者として平和と和解を希求し続けていきたいと思っている。その思いの一端をNHK ラジオを通じて語ったのであるが、リスナーにどこまで伝えることができたのかは分からない。戦後70年の今年の追悼礼拝に多くの方々が参加くださることを期待している。

とよかわ・しん (客員研究員)

教学補佐のご挨拶

杉田有衣

たくさんの方のことを学び、さまざまな出会いがあったこの場所で、新たなスタートをきれることによる喜びを感じています。今はまだ、戸惑いや不安もありますが、日々学びながら仕事をしていきたいです。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

また、このような貴重な機会をいただきましたことに、あらためて感謝いたします。

すぎた・ゆい (教学補佐)

雑録

徐正敏

今年度から、『キリ研』の主任という責任ある立場

になった。何もかもがはじめてで、経験や知識がなく、迷惑をかけていると感じる。けれども、主任としての責務を果たすべく、力を尽くしていきたいと思っている。

日本のこと、韓国のこと、そして日韓関係について、私は常に気になる立場におかれている。現在の日本の政局、そして韓国の政治状況のことを常に案じている。

『キリ研』の研究課題の一つとして、アジア、特に東アジアのキリスト教の歴史と現状を把握し、整理することが挙げられるのではないだろうか。宗教、特にキリスト教というのは、理論でなく実践であることは確かであると思うので、「東アジアにおけるキリスト教」というテーマは、重要な研究課題であるといえるだろう。

今回の『あんげろす』は、新メンバーのエッセイ集となっている。新たな覚悟が、この『キリ研』において実現されることを祈っている。

そ・じょんみん (教養教育センター教授、主任)

研究所活動 (2015年4月～7月)

宣教師研究プロジェクト公開研究会

「明治学院と松本亨」

開催日時：2015年5月15日(金)14:00-17:00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館92会議室

講師：武市一成 (國學院大学兼任講師)

東アジア戦後キリスト教史研究プロジェクト公開講演会

「韓国の民主化運動と日韓キリスト教—TK生の記憶」

開催日時：2015年6月20日(土)15:00-17:00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館1455教室

講師：池明観(元東京女子大学教授)

・『清泉女子大学 キリスト教文化研究所年報』第 23 卷、創文社、2015。

#### キリスト教主義教育研究プロジェクト公開研究会

「北星学園大学問題」が日本の大学に問いかけたもの——学問研究、学生教育、教職員の職業倫理(コミットメント)について」

開催日時：2015年6月24日(水)18:00-20:00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館1351教室

講師：高橋一(北星学園理事)

報告：長谷川綾(北海道新聞記者)

#### 寄贈

・長崎純心大学長崎学研究 第13輯

『1865年 プティジャン書簡 - 原文・翻刻・翻訳 - 「エリア写本より - 「信徒発見150周年」記念」

・『新約聖書 訳と註6 共同書簡／ヘブライ書』田川健三訳著、作品社、2015。

・『玉川の文化史—六玉川の古歌と風土—』玉井健三著、創風社出版、2015。

#### 宣教師研究プロジェクト公開講演会

「来日長老教会宣教師の戦中戦後：ラマート、ハナフォード、ポーベンカークの活動・経験とその意義」

開催日時：2015年6月27日(土)13:00-15:00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館91会議室

講師：辻直人(北陸学院大学教授)

・『フラナリー・オコナーのジョージア——20世紀最大の短編小説家を育んだ恵みの地——』サラ・ゴードン著、田中浩司訳、新評論、2015。

・『もしも君に会わなかったら』早乙女勝元著、新日本出版社、2014。

#### 白金文学文化研究プロジェクト公開研究会

「西脇順三郎について—詩と永遠」

開催日時：2015年7月4日(土)14:00-16:00

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

講師：新倉俊一(本学キリスト教研究所協力研究員)

#### 新着図書

- ・『Reallexikon für Antike und Christentum』2015。
- ・『REVELATION』Craig R. KOESTER、2014。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 88、日本基督教団出版局、2015。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2015。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2015。
- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2015。



---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第67号

---

2015年7月10日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL: 03-5421-5210 / FAX: 03-5421-5214  
Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩

2015 年度キリスト教研究所メンバー

所長 渡辺祐子

主任 徐 正敏

所員

教養教育センター：植木 献、嶋田彩司、永野茂洋  
文 学 部：久山道彦、齊藤栄一、播本秀史  
経 済 学 部：鵜殿博喜、大西晴樹、手塚奈々子  
社 会 学 部：坂口 緑、佐藤正晴、深谷美枝  
法 学 部：鍛冶智也  
国 際 学 部：司馬純詩

(以上 16 名)

名誉所員

遠藤興一、小田島太郎、加山久夫、久世 了、佐藤 寧、柴田 有、千葉茂美、  
辻 泰一郎、中山弘正、新倉俊一、橋本 茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起  
水落健治、森井 眞、山崎美貴子、吉田 泰

(以上 18 名)

客員研究員

朱 海燕、豊川 慎

(以上 2 名)

協力研究員

Andrew H. Ion、石川 理、石本東生、一色 哲、稲垣久和、今村正夫、岩崎次郎、  
岩田ななつ、大倉一郎、岡部一興、加藤拓未、北川一明、木村 一、清澤達夫、小暮修也、  
小林孝吉、齋藤元子、佐藤飛文、島田由紀、清水有子、下村 優、徐 亦猛、鈴木 進、  
孫 永律、高井ハナ由紀、田中浩司、辻 直人、手代木俊一、中井純子、中島耕二、原 豊、  
洪 伊杓、牧 律、松谷暉介、丸山義王、宮坂弥代生、村上志保、村上文昭、吉馴明子

(以上 39 名)